文系女子大生の就業意識に関する調査研究
－地元就職促進に向けて－

吉村英俊、林　一夫

１．研究の背景

(1) 地元就職促進に向けた北九州市及び北九州市立大学の取り組み

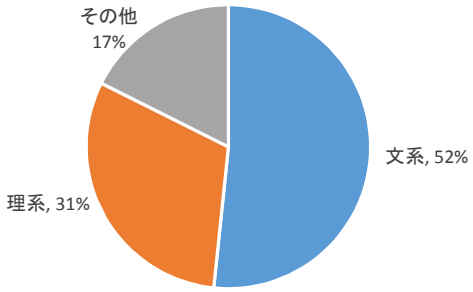
北九州市では、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、女性と若者の定着などにより社会動態をプラスにしていき、地方創生の「成功モデル都市」を目指すことを基本方針として、さまざまな取り組みを実施している。具体的には「若者ワークプラザ北九州」を拠点に地元企業とのマッチングの強化を図ったり、「U・I ターン応援オフィス」を設置したりして、若者の地元就職を推進している。また女性の活躍を推進するために、就業、就業継続・キャリアアップ、創業など、総合的に支援するワンストップ窓口「ウーマンワークカフェ」を設置したり、国･県･市･民間企業などの連携による女性の活躍に対するオール北九州の応援体制を構築するなどの事業を進めている。

このような中にあって、北九州市立大学においても「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC プラス）」[1)]の代表校として、域内学生の当該地域就職率を 10%（24.2%→34.2%）に向上させることを目標として掲げ、産学官が連携した地元企業でのインターンシップや合同企業ガイダンス、就職相談や地域・地元企業の魅力を紹介するスペースの小倉都心部への開設、学生の事業化や起業マインドを醸成するレクチャーやセミナー、市域志向科目の単位互換による域内学生のシビックプライド醸成などの事業を展開している。

(2) 北九州市及び下関市の大学の定員

ここでは前述の“COC+”を取り組む大学の学部生を対象に定員をみてみたい。

まず一学年あたりの“定員”についてみてみると、“文系”が過半数(52%)を占めており、多いことが分かる。一般に、工学部の学生は製造業や建設業に就職するなど、理系は就職先の業界がおおむね決まっているのに対して、文系は自由度が高く、どの業界にも就職することができる。さらに言うならば、どの地域にも就職することができる。

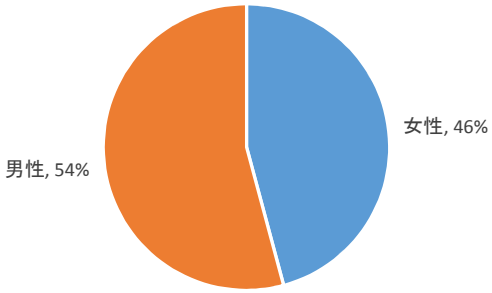


注記：その他には、スポーツ学部、家政学部、人間科学部、保健福祉部、子ども学部が含まれる。
九州工業大学情報工学部は、飯塚市に立地するため、除外した。

出所：大学受験パスナビ,
https://passnavi.evidus.com/search_univ/

図 1. 大学の定員

次に、文系を男女別にみてみると、男性の方がやや多いものの、ほぼ半々である。以上から調査研究で対象にする“文系の女子大生”が全体の 1/4 もいることが分かる。



注記：男女比は、平成 28 年度の新入生の男女比をもとに算出した。

出所：大学受験パスナビ，https://passnavi.evidus.com/search_univ/

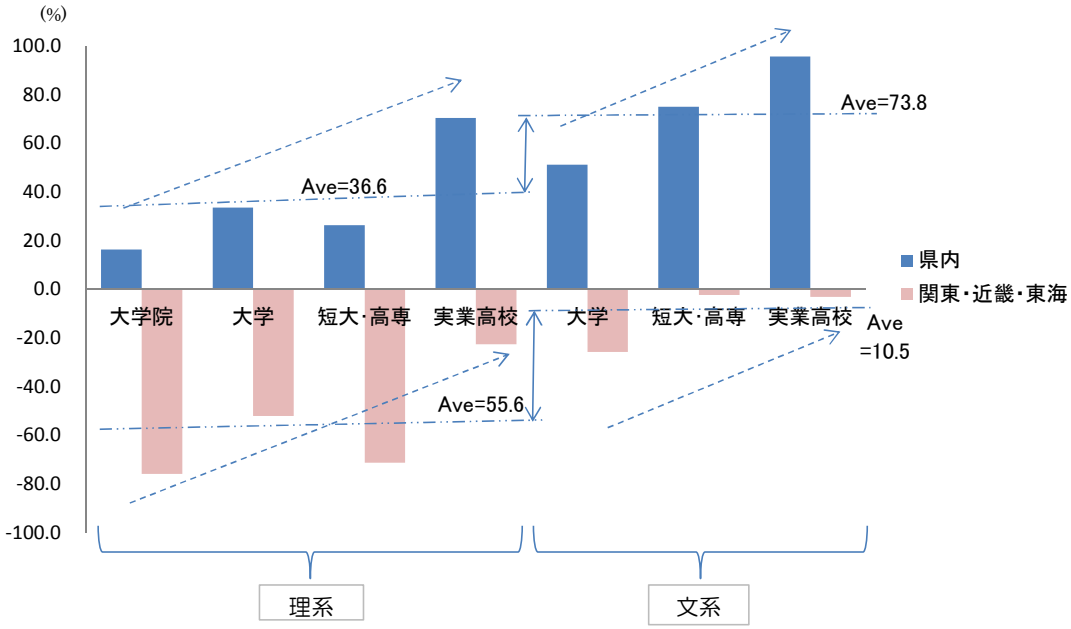
図 2. 文系学部の男女比

２．先行研究　ー当研究所による大学生及び女性の就業等に関する調査研究

(1) 北九州地域の大学等卒業者の就職地域

北九州地域の大学院、大学、短大･高専、実業高校 2)を対象に、2009 年度、2009 年 3 月に卒業した者の就職地域を調査した。その結果、文系の学生の方が理系の学生よりも地元就職率が高く（文系平均＝73.8%、理系平均＝36.6%）、さらに学歴が低いほど地元就職率が高くなっていること（理系大学院＝16.2%、工業高校＝70.3%）が分かった［吉村 2010］（図 3）。

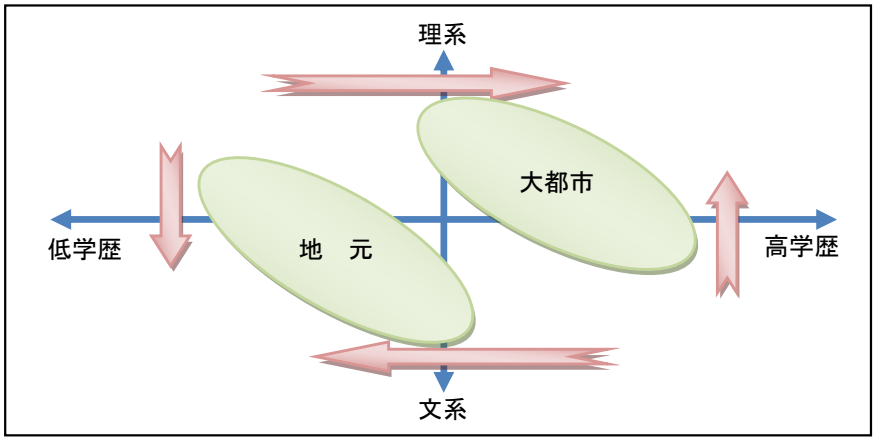
また別の先行研究［吉村他 2008］によれば、高学歴者は仕事をつうじて自己実現を図ろうとしており、彼ら／彼女らが満足する仕事の多くは大都市圏に集積している。一方、低学歴者は平穏で安定した生活を希望しており、住み慣れた地元に定着したいと考えている。



出所、吉村（2010）p.55

図 3. 学校カテゴリー別の就職地域

以上の調査結果より、地元就職の観点からみれば、文系の学生及び実業高校を狙うのが双方にとって好ましい（winwin）ことが分かる。



出所、吉村（2010）p.56

図 4. 学歴及び理系･文系の視点からみた就職地域

(2) 女性の活躍推進に関する調査

2015 年 4 月 1 日、女性の雇用、職域拡大、管理職登用などを促す法律「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律（以下、女性活躍推進法）」が施行され、301 人以上の労働者を雇用する事業主は、自社の女性の活躍状況を把握し課題を分析したのち、行動計画を策定することが義務づけられた [3)]。

また北九州市立男女共同参画センター・ムーブが、2014 年 10 月に市内企業に実施した調査結果によれば、製造業、運輸業、建設業において、女性の管理職への登用や活躍推進の取り組みなどに改善が必要であることが分かった。

こういった状況を踏まえ、2015 年度、市内に集積する「製造業」にターゲットを絞って、雇う側である企業の女性活用の実状と、雇われる側である子育て世代の女性及び女子大生の就業意識を調査した。結果は以下のとおりである。

①市内企業の女性活用の実状

市内に本社が立地する中小製造業 21 社に対して、2015 年 10 月～12 月の間、女性の雇用状況や活用促進に向けた取り組みをヒアリング調査した［吉村他 2016］。

《調査結果の総括》

正規社員の多くは総務や人事、経理などの「管理」部門で「事務」を担っている。一方、非正規社員の多くは「製造」部門で組立や梱包、検査などの「軽作業」に従事している。

女性の雇用を阻害する要因には、「結婚や出産による退職のリスク」、「需給のアンマッチ（女性は事務職を希望しているが、企業が欲しいのは製造や設計･技術、営業に従事できる人）」、「男性中心の職場では女性への接し方が分からない」などがある。また子育て中の女性は、子育てが生活の中心であり、正規社員を避ける人も多い。

女性の管理職は、主に総務や人事、経理といった管理部門にいるが、これまでリーダーを育てるといった観点で育成してこなかったため、多いとはいえない。また昨今、あえて総合職ではなく、一般職や職種･勤務地域限定職を志向する女子学生も増えている。

こういった状況にあって、企業はさまざまな取り組みを実施してきている。産休や育休制度はすでに多くの企業で導入されており、その活用促進に努めている。とくに子育てに配慮した取り組みについては、個人の事情を反映した勤務体系の導入や、半日もしくは 1 時間単位の年休制度の導入、一旦退職した人が復職できる制度の導入、急な欠勤や遅刻、早退を可能にする多能工化の推進などがある。また転勤を嫌う女性が多いことから、エリア専門職を導入した企業もある。

②子育て世代の女性の就労意識

以前働いていたが、現在は専業主婦もしくは無職、ただし今後働きたいと思っている北九州地域[4)]、福岡市、東京都に住む 30 代 40 代の女性 309 名（各地域 203 名）を対象に、2015 年 10 月、インターネットを使って調査した［吉村他 2016］。

《調査結果の総括》

出産もしくは結婚を機に退職したものの、将来はパートもしくはアルバイトで、事務の仕事をし、給与は配偶者の扶養から外れない程度でよい。

③女子大生の就労意識

就職活動を控えた北九州市立大学 3 年生女子 86 名（文系 50 名、理系 36 名）を対象にアンケート調査を行った［吉村他 2016］。

《調査結果の総括》

仕事か、それとも家庭か、と問われたとき、多くの女子学生は「家庭」を優先する。その傾向は自宅生（親と一緒に住んでいる）において顕著である。そういったことから、自宅生においては地元への就職意識が強く、管理職になりたいという学生は少ない。

アパート生（親元を離れて住んでいる）においては、そもそも何らかの思いや志があって親元を離れて北九州市立大学へ進学していることもあり、自宅生に比べて仕事への拘りが強く、首都圏や関西圏で働くことや、管理職になることに積極的である。しかし全体的にみれば、野心的な生き方（バリキャリ）よりも、堅実な生き方（ゆるキャリ）[5)]を志向する学生が多い。

以上の調査結果から、女性の特徴を生かして、職域の拡大を図り、雇用を増大させる必要があるとともに、ゆるキャリからバリキャリへ、働く意欲を引き出すことが重要であることが分かった。また、地元就職の観点からみれば、女性は気に入った企業や職があれば、地元で就職してくれることが分かった。

３．先行研究　－女子大生に関する調査研究

(1) 女子大生の結婚観と職業観

城島博宣、白河桃子他が、東京都の中堅女子大に通う女子学生 509 名を対象に行ったアンケート調査結果［城島･白河他 2012］によれば、理想のライフコースは「ゆるく働き続け、早期に結婚して出産する」もしくは「子育て期間中は一時的に家庭に入り、子育て後にパートなどで復帰する」である。また仕事感は「一家の主な家計は男が担い、女は家計責任を負わず、自己実現のために働く」であり、結婚して養ってもらうのが基本というベースのもとに、働き方を選択している。就業感においても、給料が高くても残業が多かったり、労働時間が不規則であったり、プライベートを削られる働き方は満足度が低い。

以上から、バリキャリとはほど遠く、ゆるキャリを志向していることが分かる。

(2) 女性の就業意識

愛知県岡崎市に立地する岡崎女子短期大学の学生が、学生 167 名、母親 162 名に対して行った調査結果［加藤･清水 2005］によれば、理想のライフスタイルは「結婚出産を機に退職し、子育てが一段落したらパートとして再就職する」というものである。なおここで注目すべきは、女子学生においては母親の就業スタイルの影響を受けているということである。

以上から、前項(1)同様、ゆるキャリを志向していることが分かる。

(3) 女子大学生の就業意識

国立女性教育会館研究国際室が、首都圏の 4 年生大学に通う学生 14 名に対してインタビュー調査を行った結果［島 2015］によれば、「就業継続を希望しているものの家庭優先であり、管理職志向はあまり強くない」、「ただし結婚･出産後は仕事を辞め、その後は職業につかないという生き方を積極的に肯定する者はみられなかった」というものであり、家庭を重視するものの、前項(1)(2)に比べ、働くことへの積極的な意思が感じられる。なお母親という身近な存在が影響力を持つという。

(4) 大学生就職意識調査

マイナビが 2017 年 4 月祖卒業見込みの文系女子大生 7,197 名に行った調査結果［2016］によれば、就職観は「楽しく働きたい（第一位）」、「個人の生活と仕事を両立出せたい（第二位）」であり、企業選択のポイントは「自分のやりたい仕事（職種）ができる会社（第一位）」、「安定している会社（第二位）」、「社風が良い会社（第三位）」である。逆に働きたくない会社は「ノルマのきつそうな会社（第一位）」、「暗い雰囲気の会社（第二位）」である。また志望職種は「営業企画・営業（第一位）」、「総務・経理・人事など（第二位）」であり、海外勤務はしたくないという。

⑸女性のキャリア意識

NTT コム オンライン・マーケティング・リサーチ株式会社が、20 代の現在働いている未婚の女性 321 名、将来働く意思のある女子大生 322 名にアンケート調査［2014］を行った結果によれば、目指す人材タイプは「他人にはできない特殊な技術･スキルを持つエキスパート型」もしくは「リーダーを補佐し、チーム全体を束ねるリーダー補佐型」である。また希望する職種は第一位が「専門的･技術的職業」、第 2 位が「事務」である。

⑷⑸の結果は、前の⑴⑵⑶と比較して、積極的な姿勢がみられるものの、会社のためというよりも、自分のために働くという考えが強いように感じられる。

以上の先行研究から、リーダーとなって職場を引っ張っていくようなバリキャリ志向はみられず、仕事と家庭を両立しながら、無理をせず、堅実な生活を営みたいと考えている様子がうかがえる。

４．調査研究の目的と方法

⑴調査研究の目的

本調査研究では、前項の先行研究の結果を踏まえ、「文系女子大生」に焦点をあて、就業意識を調査し、地元就職を促進するための考え方を提案する。

⑵調査研究の方法

①全国の実状把握

法学部、経済学部、経営学部、商学部、文学部、社会学部に所属する就業意識が高いと思われる 3 年生及び 4 年生を対象に、インターネットを用いて就業意識を調査する。

②北九州市の実状把握

ここでは北九州市立大学の外国学部、経済学部、文学部、法学部、地域創生学群に所属する 3 年生及び 4 年生を対象にアンケート調査を行い、全国と比較する。

５．調査結果

(1) 全国の調査結果

①回答者の属性

2016 年 12 月に 3 年生 156 名、4 年生 156 名、計 312 名[6]に対して、インターネットを用いてアンケート調査を行った。回答者の属性は、学部別では文学部及び経済系（経済学部、経営学部、商学部）が多く、また 2/3 強の学生が親と同居している。なお、ここで偏差値は回答者に現在の能力を偏差値で問うたものであり、あくまで目安でしかない。

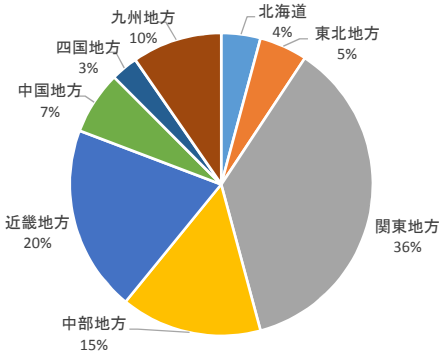


図 5. 居住地域（N=312）

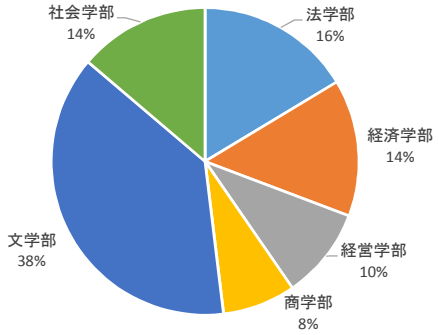


図 6. 所属学部（N=312）

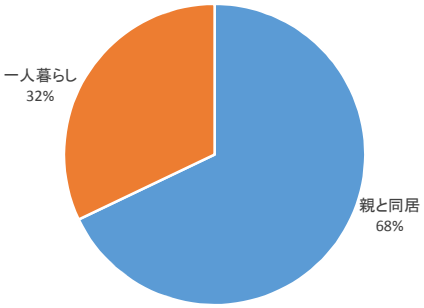


図 7. 居住形態（N=312）

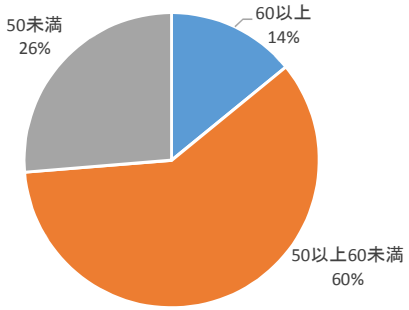
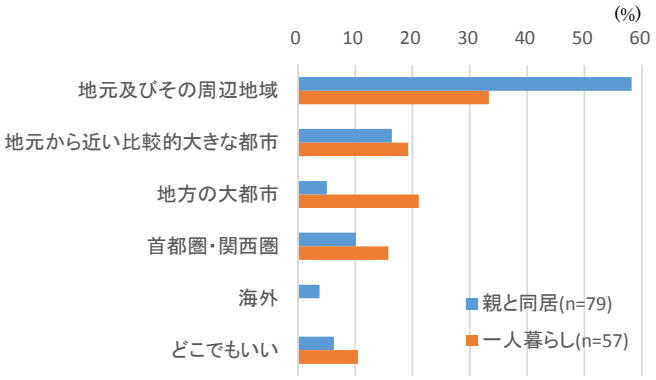


図 8. 現在の実力（偏差値）（N=312）

②就職したい地域

関東地方及び近畿地方に住む学生を除いた 136 名に対して、就職したい地域をみてみたところ、全体では「地元」が 7 割弱、福岡市や広島市、札幌市といった「地方の大都市」が 1 割強、「首都圏・関西圏や海外、どこでもいい（以下、首都圏・関西圏）」が 2 割強であった。

これを居住形態でみてみると、親と同居している学生は、「地元志向」(75%)



注記、関東地方及び近畿地方居住者を除く
地方の大都市とは、福岡市や広島市、札幌市、仙台市など

図 9. 就職したい地域（N=136）

が強く、地方の大都市や首都圏・関西圏を志向している学生は少ない。なお、一人暮らしの学生においても地元志向が強い（5 割強）が、親と同居している学生に比べれば、地方の大都市や首都圏・関西圏を志向している。

地元で就職したい理由の多くは、「家族と一緒もしくは近くに暮らしたい」、「現在の生活に慣れているから」、「地域に愛着がある」であり 85%を超える。一方、首都圏・関西圏で就職したい学生は、「若いうちはいろいろな経験がしたい」といった積極的な理由を挙げている（4 割弱）。とはいえ、「地元に希望する就職先がないから」といった消極的な理由を挙げる学生が 3 割弱いるのも事実である。なお、偏差値の違いによる顕著な違いは見られなかった。

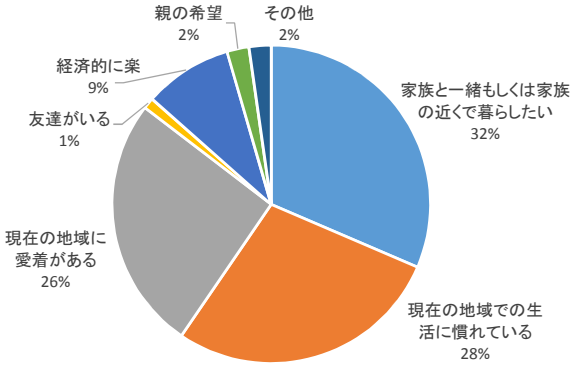


図 10. 地元に就職したい理由（N=89）

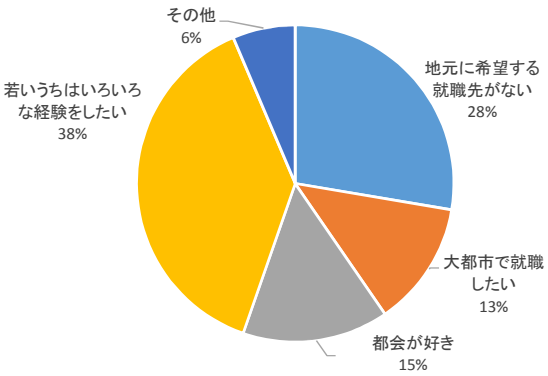


図 11. 首都圏・関西圏に就職したい理由（N=31）

③理想の働き方

多くの学生は、職場での成功やキャリアアップを優先するキャリアウーマンを目指した働き方（バリキャリ）よりも、家庭生活を大切にし、自分の趣味や交友を楽しみながらマイペースで働きたい（ゆるキャリ）（53%）と考えている。また一旦就職するものの、いずれは専業主婦になりたいと考えている学生もけっして少なくない（12%）。

働き方と偏差値の関係をみてみると、偏差値 60 以上の学生はバリキャリ志向が強く、一方、60 未満の学生はゆるキャリを志向している。なお、就職地域や居住形態の違いによる顕著な傾向は見なれなかった。

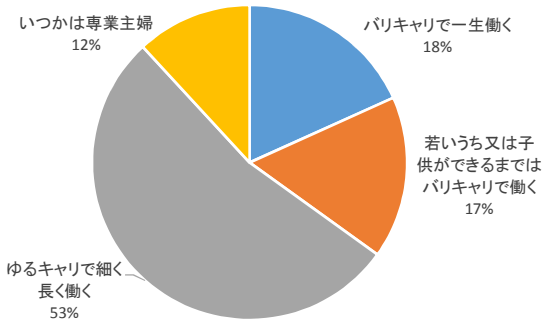


図 12. 理想の働き方（N=312）

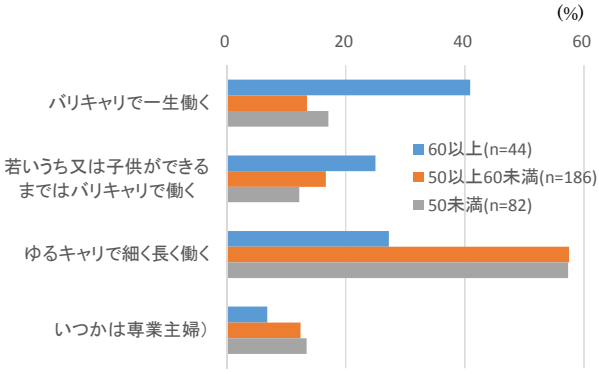


図 13. 偏差値の違いによる理想の働き方（N=312）

将来、職場でどういった立場でいたいのか、約半数の学生が自らリーダーとなってチームを率いるのではなく、「リーダーを補佐する」立場でいたいと考えている。また他人にはできない「特殊な技術やスキルを持ちたい」と考えている学生も多い（3 割弱）。さらに「他人の指示に従う」という学生も少なくない（16%）。なお、就職希望地や居住形態による顕著な傾向はみられないが、偏差値が高い学生の方がリーダー志向が強く、指示待ち志向が弱い。

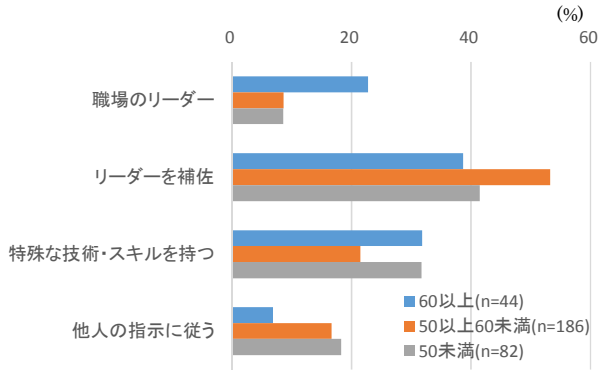


図 14. 将来の職場での立場（N=312）

就職後のキャリアプランは、「一つの会社に定年まで勤める」が多く、半数近くに及ぶ。居住形態による顕著な差異はないが、偏差値が高い学生の方が、一つの会社に定年まで勤めたいと思っており、またバリキャリ志向が強いため、家庭への帰属意向は弱い。また首都圏・関西圏での就職を希望している学生は、一つの会社で定年まで勤めたい（38%）と考えている学生が多いものの、「転職などでキャリアアップしたい」（35%）と考えている学生も多い。

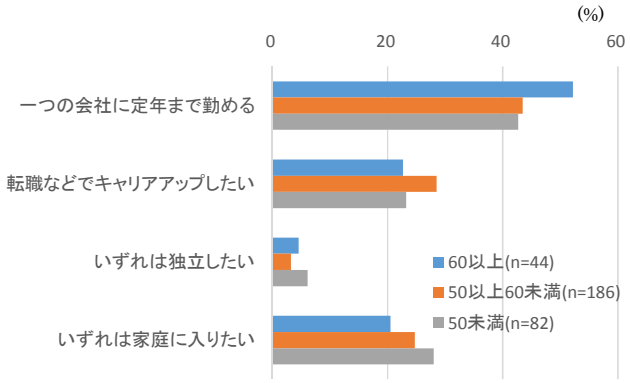


図 15. 就職後のキャリアアップ（N=312）

出産後の仕事の継続については、2/3 近い学生が「産休・育休を使って継続したい」と考えており、子育て支援にかかわる制度が浸透していることがうかがえる。また「一旦辞めるが、非正規で復帰する」と考えている学生は 1 割に満たず、「正社員で復帰したい」と考える学生（15%）を下回り、正社員できちんとした身分で働きたいと考えている。

また 2/3 の学生が何らかのかたちで母親の影響を受けているという。

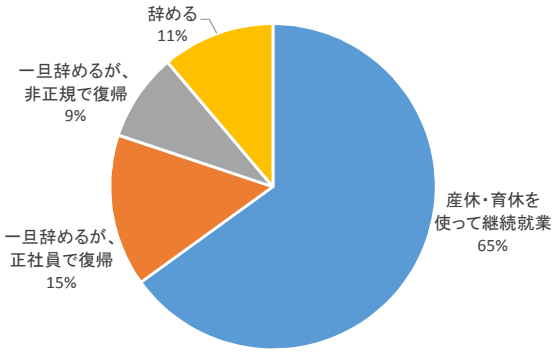


図 16. 出産後の仕事（N=312）

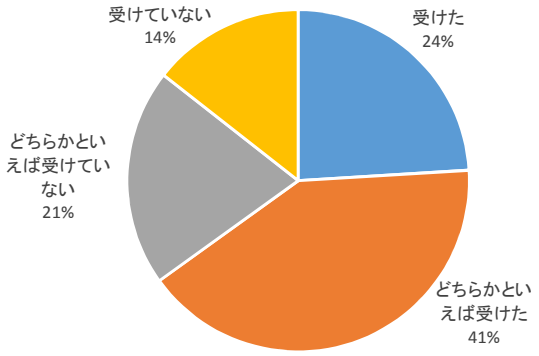


図 17. 母親の影響（N=312）

④職業観・職種・企業

職業感については、「楽しく働きたい」が最も多い。ここで注目すべきは、“楽しく働く”の意味であり、やりがいといった前向きなものであればよいが、和気あいあいといったものでは困る。さらに調査する必要がある。これを就職希望地域でみてみると、地元就職を希望している学生は、「仕事と生活の両立」を希望しており、細く長く働きたいという働き方に通じる。一方、首都圏・関西圏を希望している学生は、「人のためになる仕事がしたい」が多く、仕事を重視していることがうかがえる。なお偏差値による差異はみられない。

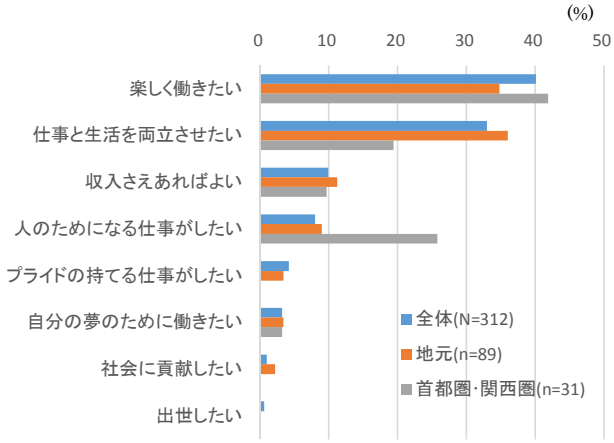


図 18. 職業感

希望する職種については、「総務・経理・人事等の管理部門」が圧倒的に多い。とくに地元就職を希望している学生において顕著である。今後 AI（人工知能）が導入され、仕事のし方が大きく変わるのではないかと予想される事務職を、なぜこれほどまで希望するのか、調査する必要がある。一方、研究・開発部門、生産技術・生産管理部門、情報システム部門を希望する学生はほとんどいない。なお職業感同様、偏差値による差異はみられない。

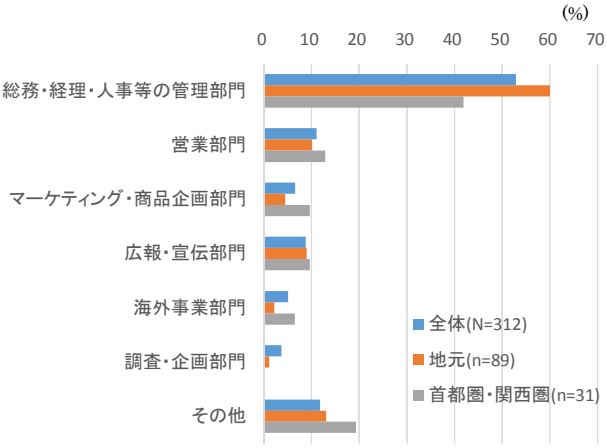


図 19. 希望する職種

就職活動で企業を選択する際に重視すること（20 項目のうち上位 5 項目を選択）についてみてみると、全体では「安定」や「福利厚生」といった安心して働ける会社を重視していることがうかがえる。とはいえ、その中でも首都圏・関西圏を希望する学生においては、「やりたい仕事ができる」や「働きがい」といった仕事そのものへの関心が高い。なお偏差値による顕著な傾向はみられない。

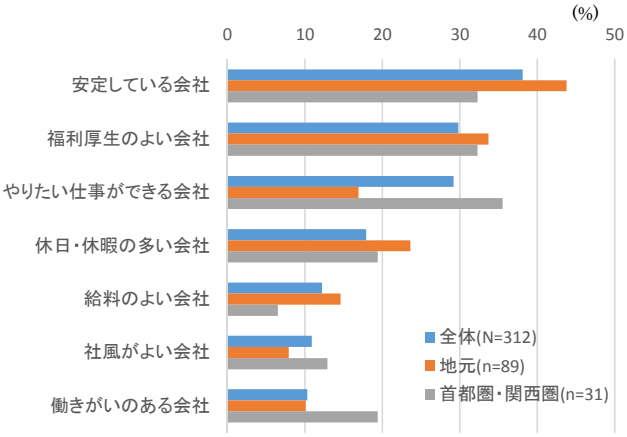


図 20. 企業選択時、重視すること

逆に就職したくない会社については、11項目のうち4項目をみてみると、全体では「休日・休暇がとれない（少ない）」「ノルマがきつい」会社が敬遠されている。就職希望地域でみてみると、首都圏・関西圏を希望する学生はノルマよりも「職場の雰囲気」を重視しており、気持ちよく仕事がしたいという意向がうかがえる。なお偏差値による顕著な傾向はみられない。

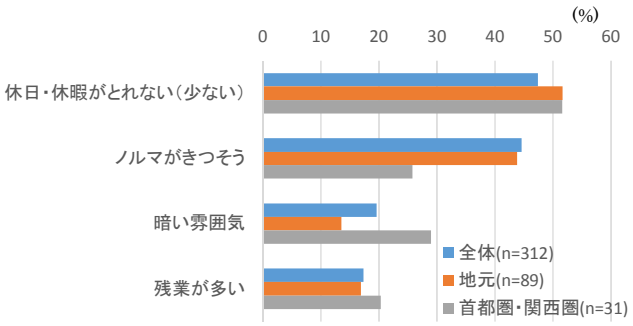


図 21. 就職したくない会社

海外勤務への意向は、全体では「海外で勤務したい」学生が1割しかいないのに対して、「海外勤務をしたくない」学生が2/3に上る。とくに地元就職希望者においては顕著であり、8割近い。偏差値別にみてみると、偏差値が高い学生ほど、海外勤務に対して積極的であることがうかがえる。

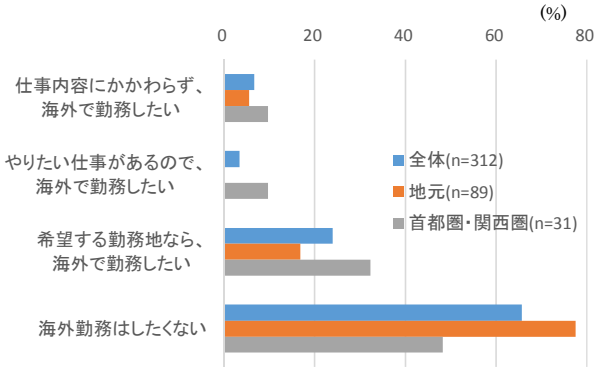


図 22. 海外勤務の意向（就職希望地域別）

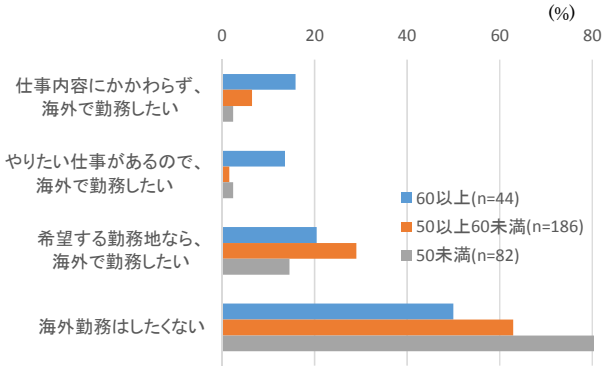


図 23. 海外勤務の意向（偏差値別）

⑤製造業及び建設業への就職意向

製造業への興味については、程度に差はあれ、「興味がある」が1/3、「興味がない」が2/3である。肯定的な意向の理由としては、「製造業はわが国の経済を牽引してきた」、「日本のものづくりに貢献したい」という製造業に対しての良いイメージにもとづくものが多い。また「作るのが好き」、「安定している」といった理由も少なくない。自動車をはじめとする大企業のイメージが影響しているものと思われる。一方、否定的な意向に対しては、「勉強してきたことが活かせない」、「男性のイメージが強い」、「知らない」といった理由が多い。知らないため、そもそも興味がないし、また間違った先入観を抱いているようにも思われる。

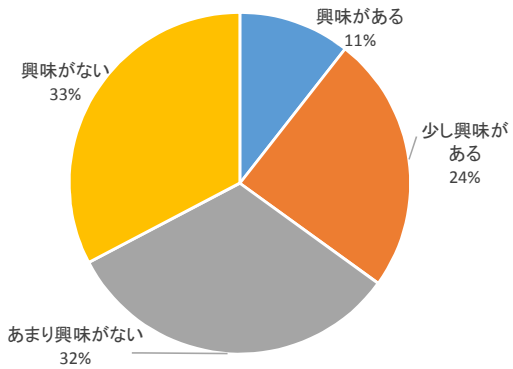


図 24. 製造業への興味（N=312）

次に製造現場で働くことの意向をみてみると、前項で総務や人事といった管理部門で働きたい学生が多かったにもかかわらず、「働いてもよい」という学生が 2 割近くもおり、「どちらともいえない」という学生を含めると半数近くに上る。「働きたくない」学生の多くは、「製造現場の 3K（きつい、汚い、危険）環境」や「そもそも関心がないこと」を理由に挙げている。肯定的な意向の理由は、「製造業に興味があるので働いてもいいかな」といった理由が多く、けっして積極的なものではない。

建設業については、「興味がある」が 2 割、「興味がない」が 8 割であり、製造業に比べて興味がないことが分かる。これらの意向の理由をみてみると、製造業と基本的には同じであるが、製造業にみるわが国の経済を支えているといったイメージがなく、どちらかといえば談合や無駄な公共工事などのマイナスのイメージを抱いているようである。

建設現場で働くことの意向をみてみると、「働きたくない」学生が 8 割近くに上り、「働いてもよい」学生は 1 割に満たない。製造業に比べて、人気がないことが分かる。否定的な理由としては、製造業以上に「3K 環境」を挙げる学生が多く、建設現場の仕事は「肉体的に無理」だと思っている学生が多い。一方、肯定する顕著な理由は、とくにない。建設業においては、製造業以上にイメージアップを図る必要がある。

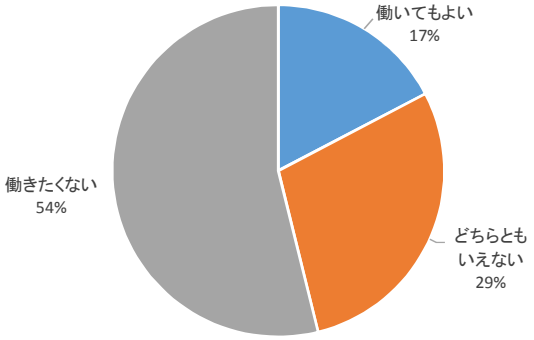


図 25. 製造現場で働くことへの意向（N=312）

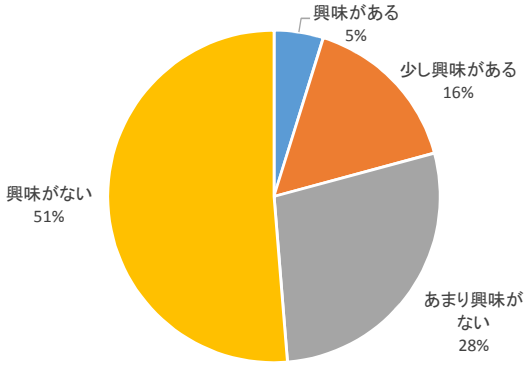


図 26. 建設業への興味（N=312）

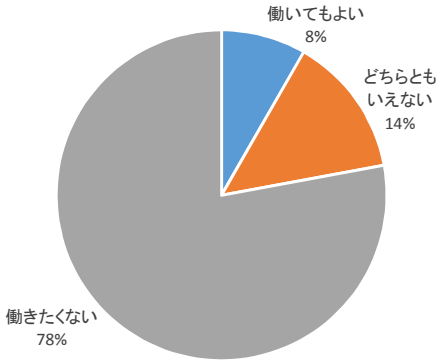


図 27. 建設現場で働くことへの意向（N=312）

(2) 北九州市（北九州市立大学）の調査結果

①回答者の属性

2016 年 12 月に、3 年生 4 年生 113 人に対してアンケート調査を行なった。回答者の属性は、学部別では経済学部と文学部が多く、法学部と地域創生学群が少ない。また約 6 割の学生が親と同居している。学年別ではこれから就職活動を行なう 3 年生が 56%（62 人）、就職活動を終え入社を待つ 4 年生が 44%（49 人）となっている。

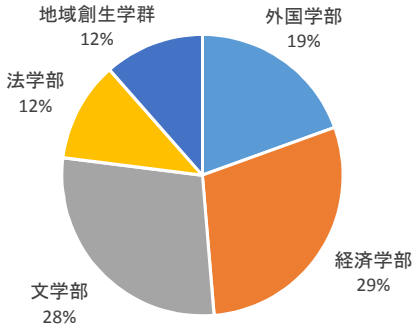


図 28. 所属学部（N=113）

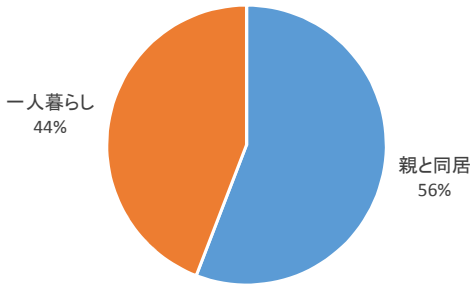


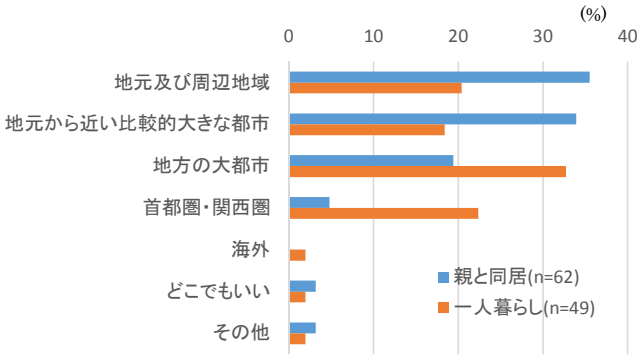
図 29. 居住形態（N=111）

②就職したい地域

全体では「地元」が 5 割、福岡市や広島市といった「地方の大都市」が 3 割、「首都圏・関西圏」が 2 割である。福岡市と広島市が近接していることから、全国と比べて地方の大都市が多いものと思われ、地方の大都市を地元とするならば、全国とほぼ同様の傾向を示している。

これを居住形態でみてみると、親と同居している学生は、明らかに地元志向であることが分かる（7 割）。首都圏・関西圏を志向している学生は少なく、海外にいたってはゼロである。これに対して、一人暮らしの学生は福岡市や広島市といった地方の大都市や首都圏・関西圏を志向している。地方の大都市が多いのが特徴的である他は、ほぼ全国と同様である。

なぜ地元で就職したいのか、その理由の多くは、前項同様、「家族と一緒



注記、地方の大都市とは、福岡市や広島市、札幌市、仙台市など

図 30. 就職したい地域（N=111）

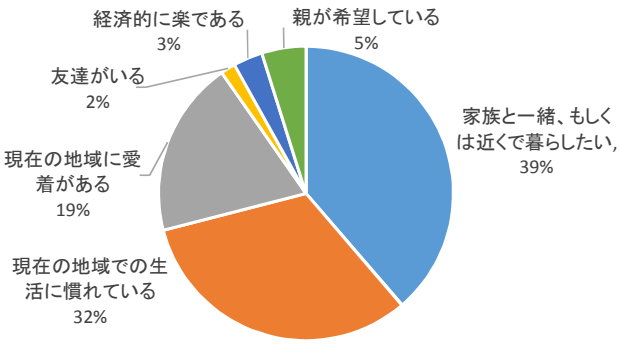


図 31. 地元に就職したい理由（N=62）

もしくは近くに暮らしたい」、「現在の生活に慣れている」、「地域に愛着がある」からであり 7 割を超える。一方、首都圏・関西圏で就職したい学生の理由は、「大都市で就職したい」、「都会が好きだから」、「若いうちにいろいろな経験がしたい」といった積極的な理由が 6 割を超える。とはいえ、地元に希望する就職先がないからといった消極的な理由を挙げる学生が 2 割強いるのも事実である。

③理想の働き方

全国と同様に多くの学生は、職場での成功やキャリアアップを優先するキャリアウーマンを目指した働き方（バリキャリ）よりも、家庭生活を大切にし、自分の趣味や交友を楽しみながらマイペースで働きたい（ゆるキャリ）（50%）と考えている。また一旦就職するものの、いずれは専業主婦になりたいと考えている学生もけっして少なくない（12%）。

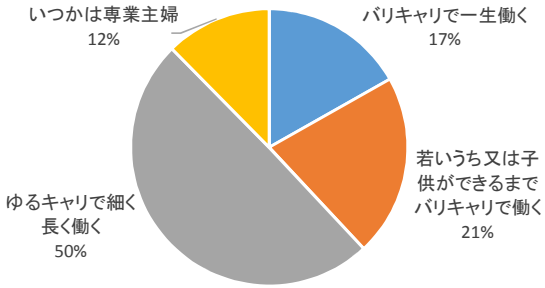


図 32. 理想の働き方（N=113）

将来、職場でどういった立場でいたいのか、これも全国と同様に、約半数の学生が自らリーダーとなってチームを率いるのではなく、「リーダーを補佐する」立場でいたいと考えている（4 割強）。また他人にはできない「特殊な技術やスキルを持ちたい」と考えている学生も多い（1/3 強）。さらに「他人の指示に従う」という学生も少なくない（16%）。就職希望地による顕著な差異はないが、やや首都圏・関西圏を希望する学生の方が、リーダー志向が強く、指示待ちが弱い。また一生バリキャリで働きたいと考えている学生においても、カテゴリーの中では最も職場のリーダーを志向する学生が多い（26%）ものの、リーダーを補佐する立場を志向する学生が一番多い。

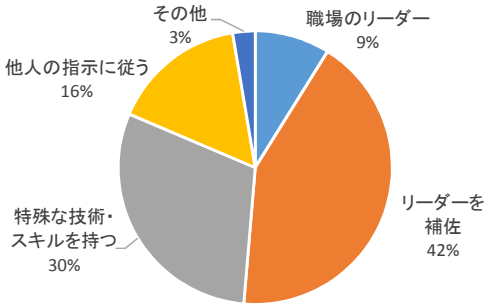


図 33. 将来の職場での立場（N=113）

就職後のキャリアプランは、「一つの会社に定年まで勤める」と「いずれは家庭に入りたい」がいずれも 1/3 強を占めている。これは地元志向の学生において、顕著にみられる傾向である。一方、首都圏・関西圏へ就職を希望している学生においては、「一つの会社に定年まで勤めたい」と考えている学生が一定量いるものの(30%)、第一位は「転職などでキャリアアップしたい」と考えており(45%)、

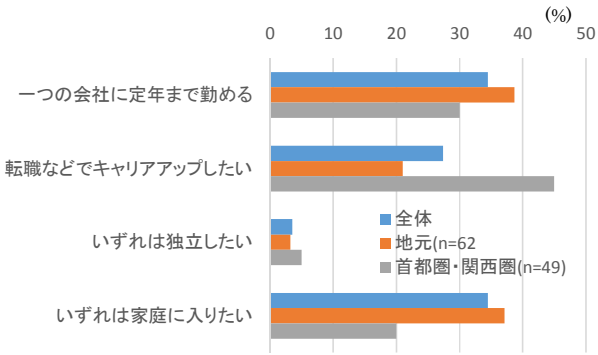


図 34. 就職後のキャリアアップ（N=113）

積極的であることがうかがえる。居住形態との関係でみると、親と同居している学生は、地元志向の学生と同様の傾向であるのに対して、一人暮らしの学生はキャリアアップ派といずれは家庭派に二分される。

出産後の仕事の継続については、6 割を超える学生が「産休･育休を使って継続したい」と考えており、親と同居している学生に多く、子育てに親のサポートが期待できるのではないかと思われる。

母親の影響については、母親の影響を受けた学生の方がやや多く(57%)、地元志向の学生において顕著である(66%)。

④職業観・職種・企業

職業観についてみてみると､「楽しく働きたい」が多く(4 割)、次いで「仕事と生活の両立」が多い(2 割強)。地元就職を希望している学生は仕事と生活の両立を目指しており、両者で 7 割に及ぶ。一方、首都圏・関西圏を希望する学生においては、全国では「人のためになる仕事がしたい」が多かったが、ここでは「プライドの持てる仕事がしたい」の割合が多い。いずれにしても仕事を重視していることがうかがえる。

希望する職種は、全体では「総務や経理、人事など」といった事務職が多く、マーケティング･商品企画、海外事業が続く。注目すべきは、全国に比べて海外にかかわる仕事をしたい学生が多いことである。なお地元就職を希望している学生は事務職を希望しており、首都圏や関西圏を希望している学生は海外事業や広報･宣伝などを希望している。

企業を選択するときに何を重視するのか、20 項目のうち上位 5 項目をみてみると、「働きがい」や「やりたい仕事ができる」といった仕事への拘りが上位 2 位を占めており、第 3 位と第 4 位は安定志向を裏付ける「福利厚

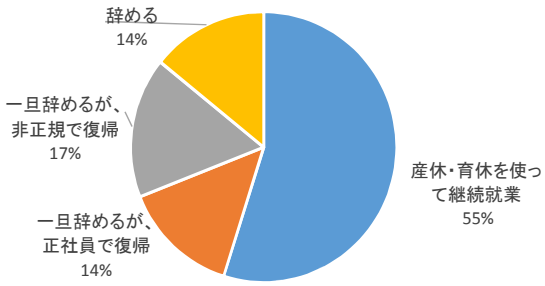


図 35. 出産後の仕事（N=113）

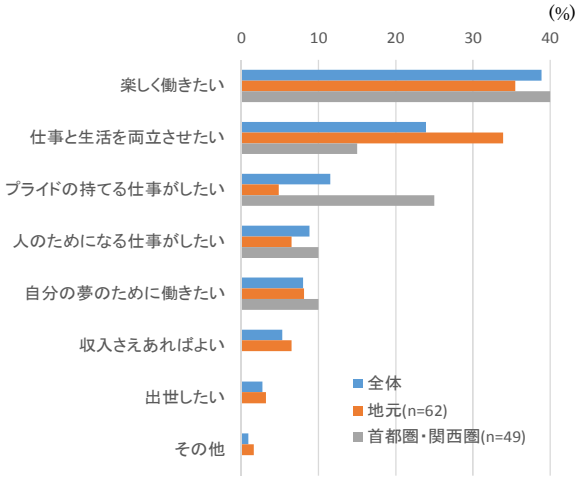


図 36. 職業観（N=113）

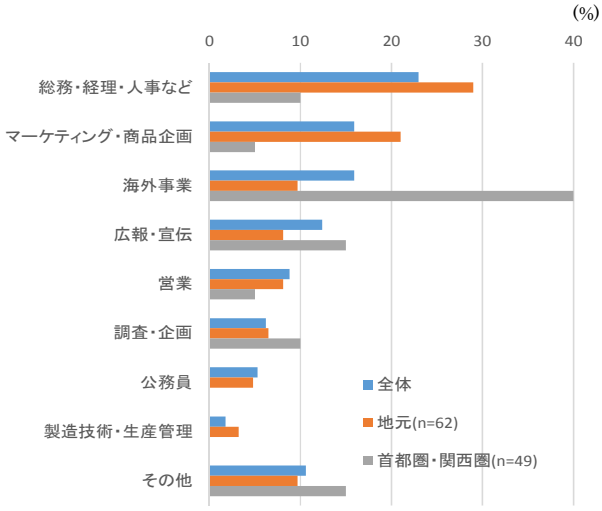


図 37. 希望する職種（複数回答）

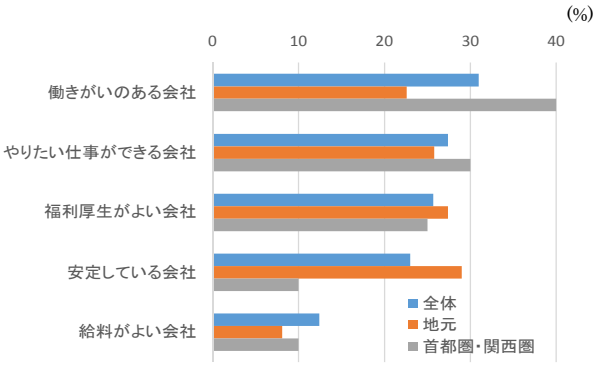


図 38. 会社選択で重視すること（複数回答）

生」や「会社の安定」が選択されている。これは全国とは逆であり、本学の学生、とくに首都圏・関西圏を希望する学生は仕事を重視しているといえる。とはいえ、地元就職希望者は安定を重視していることは否めない。

逆に行きたくない企業とは何か、11 項目のうち上位 4 項目をみてみると、首都圏・関西圏を希望する学生は、「職場の雰囲気」や「仕事の内容」といった仕事に打ち込める環境を重視しているのに対して、地元希望者は「休日や休暇」、「ノルマ」といった安心して仕事ができる環境を重視していることが分かる。

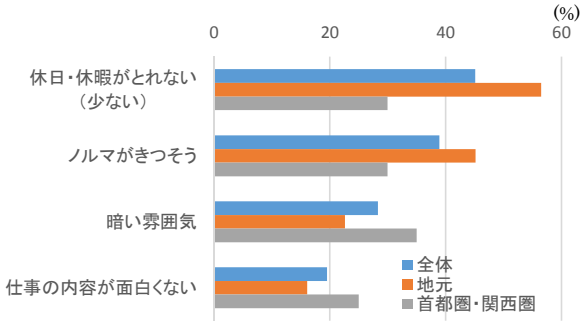


図 39. 行きたくない会社（複数回答）

海外勤務については、全体では「海外で勤務したい」積極的な学生が 15%いるのに対して、「海外勤務はしたくない」消極的な学生が 60%もおり、これもゆるキャリ志向の表れではないかと思われる。なお地元で就職を希望している学生においては、消極派が 70%を超え、逆に首都圏・関西圏を希望している学生では積極派が 40%もおり、これは両者の就業意識が顕著に表れているものだと思われる。

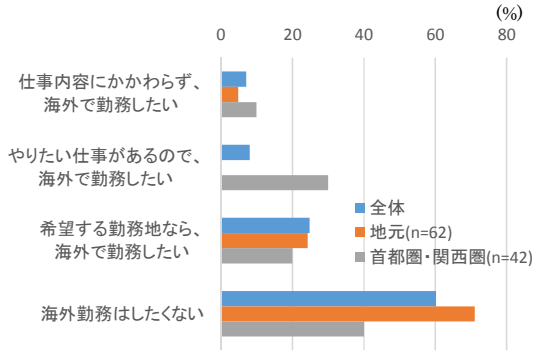


図 40. 海外勤務の意向（N=113）

⑤製造業及び建設業への就職意向

製造業に興味がある学生は、強弱はあれ、4 割を超える。全国と同じである。また就職希望地域による差異はみられない。ただし働き方において、ゆるキャリを志向している学生においては、5 割（半数）が製造業に興味持っている。製造業は他の産業に比べて企業規模が大きく、また世界で活躍している企業も多いことから、安定性を求める学生にとっては魅力的なのかもしれない。

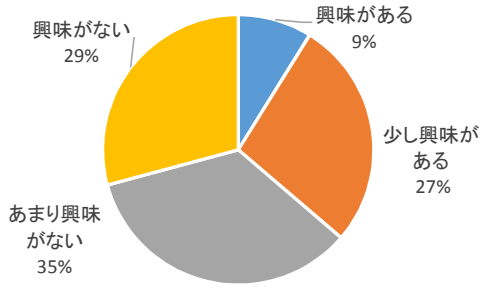


図 41. 製造業への意向（N=113）

一方、建設業についてみてみると、興味がある学生は 2 割に満たない。製造業の半分である。全国と比べても少ない。とくに首都圏・関西圏で就職を希望している学生には人気がない（1 割）。詳細な理由は分からないが、調

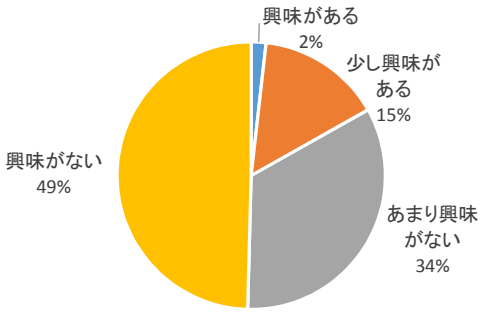


図 42. 建設業への意向（N=113）

査する必要がある。

(3) 調査結果のまとめ

調査の結果、北九州市立大学（以下、北九大）の学生が抱く就業意識と全国との間に大きな差異はない。また先行研究の結果ともほぼ同様である。

以下に地元就職を希望する学生の特徴を示す。

- 親と同居している。
  - 福岡市や広島市といった地方の大都市まで含めると、北九大の学生においては9割近く（全国8割）が地元就職を希望している。
  - 地元を希望する理由は、「家族と一緒に暮らしたい」「今の生活に慣れている」「地域に愛着がある」といった現在の生活を是認した意見が多い（北九大9割、全国8割）。
- 細く長く働きたい（ゆるキャリ）。
  - したがって、リーダーとなってチームを率いるのではなく、リーダーを補佐したいと考えている。
  - 他人にはできない特殊な技術やスキルを持ちたいと考えている学生も多い。
  - とくに地元志向の学生は、「1つの会社に定年まで勤めたい」「いずれは家庭に入りたい」が多い（いずれも4割弱）。
  - 出産後も産休や育休を使って継続して働きたい（6割強）。
  - 何らかのかたちで母親の影響を受けている（2/3）。
- 楽しく働きたい、また仕事と家庭を両立させたい。
  - 会社には、働きがいと安定の両方を求めている。
  - 総務や経理･人事といった事務職を希望している。
  - 海外勤務には消極的である。

一方、自分が優秀だと考えている学生、親元を離れて一人暮らしをしている学生は、地元希望の学生に比べて、概してバリキャリであり、仕事への意識が高く、首都圏や関西圏、ひいては海外で働きたいと考えている。またリーダーとしてチームを率いたり、転職をつうじてキャリアップを図りたいと考えている。

製造業及び建設業については、興味がない学生の方が多い。その中にあっても、製造業の方が建設業に比べて興味を持っている学生が多い。これは製造業にはわが国の経済を牽引しているイメージがあるからであるが、強い関心を抱いている学生は少ない。また製造業や建設業は企業規模が大きいため、安定している、また事務の仕事があるのではないかと思っている学生が少なからずいるのも事実である。

６．地元就職促進に向けた基本的な考え方

(1) 自宅生の囲い込み

地元就職を希望している学生は、現在「親と同居」しており、将来会社では「総務や人事、経理などの管理部門で事務」の仕事をし、「細く長く」かつ「楽しく」働きたいと考えている。したがって、まずは「親と同居している学生」を第一ターゲットとし、彼女らを逃がさないように囲い込む必要がある。そしてそのためには、彼女らが希望する仕事（職）及び職場環境を提供できる企業を多く集め提供する必要がある。

具体的には、総務や人事、経理などの管理部門で事務ができる企業でなければいけない。ただしここでの事務は、例えば経理であれば、取引先に対して売掛金を回収したり、支払いを待ってもらったり、銀行に資金調達に奔走するような精神的なタフさを要求される仕事ではなく、決められた仕事を淡々と行なう（こなす）定型業務である。企業においては、今後非正規社員に置き換えていくような仕事であり、将来人工知能（AI）の導入によって劇的に省力化されるかもしれない仕事である。そういった意味から、「なぜ事務がよいのか」「本当に事務でよいのか」という疑問が生じる。

次に細く長く働くことができる、いいかえれば仕事と生活が両立できる、子供ができても継続して仕事ができる就業環境を整備し提供することが期待される。北九州市内の中小製造業の実状を調査した結果［吉村他 2016］によれば、子育てに対して、多くの企業ではすでに個人の事情を反映した勤務体系や、半日もしくは時間単位の年休制度の導入など、さまざまな制度を導入している。こういった取り組みにより、女性においてはこれらの制度を活用し、出産を機に退職する人は少なくなったという。なお企業は子育て支援にかぎらず、働きやすい環境や制度を整備するものの、学生においては正社員で雇用されたならば、突発的な残業やリーダーとして責任ある仕事を任されることを当然のこととしなければならない。残業や責任は嫌だが、正社員がよいは虫がよ過ぎる。ここでも「なぜ細く長くがいいのか、なぜバリキャリを志向しないのか」「仕事をつうじて成長したり、社会に貢献したくないのか」といった疑問が生じる。

さらに「楽しく働ける」ことが期待される。ここで最大の疑問は「楽しく」の定義である。前述のとおり、人は成長すること、もしくは地域や社会に貢献することによって生きていることを実感する。これが仕事の目的ともいえる。一方、不安や不満がなく、和気藹々と楽しくもまた、楽しくである。0 か 100 ではないが、どちらかといえば、後者のウエイトが大きいように思える。いずれにしても「楽しくとは何か」について調査する必要がある。

なおここでこれらの要件を企業側が提供できなければ、北九大生においては、通勤可能で、商業・サービス業が少なくとも北九州市よりも集積する福岡市に仕事（職）を求め逃げていくものと思われる。

(2) 地方の大都市を希望する学生の取り込み

一人暮らしの学生は、福岡市や広島市、札幌市、仙台市といった地方の大都市での就職を希望している。とくに北九大生においては顕著である。また大都市での就職を考えてい

る学生の中には、地元に適した企業がないので止むを得なく大都市での就職を考えているもいる。そこで北九州市をはじめ熊本市や岡山市など、これらの大都市に近接する比較的規模の大きな都市は、これらの大都市を希望する学生を取り込む（奪う）ことが考えられる。北九州市であれば、北九州地域に住んでいるが、福岡市で就職したい学生を狙うのである。

これらの大都市と比較して、少なくとも都市の総合力や仕事の機会では劣っていることから、魅力的な企業を“発掘”し提供するしかない。つまり、前項であげた条件を提供することができる企業を大学や行政機関、商工会議所などが多く“発掘”して効果的に発信するのである。

７．残された課題

前項(1)(2)は、いずれも学生のニーズにあった企業を発掘して提供するというものであった。しかし現実には前述のとおり、事務の定型業務は非正規社員に委ねる傾向にある。また企業は、国内の同業他社はもとより海外の企業とも競走しなければならない中で、新しいアイデアを考案し事業化したり、事業を見直し効率化したりするバイタリティに溢れた学生を求めている。果たして企業が、学生が考えているような人材を企業が必要としているかというと疑問を感じる。企業が求めているのは、バリキャリ志向の学生ではなかろうか。学生自身が意識を変えないと、今後優秀な留学生に職を取られ、就職できなくなるのではなかろうか。不景気になったとき、真っ先に求人がなくなるのは、こういった職ではないかと思われる。

このような状況から、学生が希望する「細く長く」とは何か、なぜ「細く長く」がいいのか、また同様に「楽しく」働くとは何か、なぜ「安定」がいいのか、さらになぜ「事務」の仕事がしたいのか、本音を聞きだす必要がある。

最後に、私見ではあるが、地方創生が叫ばれて久しい中、その担い手である若者は安定を求めるのではなく、“好奇心”に満ち、弾けるぐらいであって欲しいと思う。

注

1）北九州市と下関市に立地する 13 の大学・高専、3 つの自治体、3 つの経済団体が一丸となって「北九州・下関まなびとぴあ」を組織し、自治体の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を後押しし、学生の地元定着等を推進する。事業期間：2015 年度～2019 年度（5 年間）

2) 調査対象校は次のとおり。

大区分	小区分	卒業者数	対 象 校
大学院	理系	694	北九州市立大学、九州工業大学
大学	理系	1,059	北九州市立大学、九州工業大学、西日本工業大学、九州ﾎﾟﾘﾃｸｶﾚｯｼﾞ
	文系	2,191	北九州市立大学、九州国際大学、九州共立大学、西南女学院大学、九州栄養福祉大学、九州女子大学
短大･高専	理系	84	北九州高専
	文系	610	西南女学院短期大学、東筑紫短期大学、九州女子短期大学
実業高校	工業系	263	小倉工業高校、戸畑工業高校、八幡工業高校
	商業系	191	小倉商業高校、若松商業高校、北九州市立高校

注記、九州工業大学情報工学部は含まれる。福祉系（九州栄養福祉大学）は文系とする。

3) 300 人以下の事業主は努力目標。

4) 北九州地域とは、北九州市、下関市、直方市、行橋市、豊前市、中間市、宮若市、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町、小竹町、鞍手町、苅田町、香春町、みやこ町、上毛町、築上町（7 市 11 町）をいう。

5) バリキャリとは、私生活の充実よりも職場での成功やキャリアアップを優先するバリバリ働くキャリアウーマンを目指した生き方である。一方、ゆるキャリとは、家庭生活を大切にし、自分の趣味や交友を楽しみながらマイペースで働く生き方である。

6) 回答者 312 名の内訳

関東（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）もしくは関西（大阪府、京都府、兵庫県）に在住の 3 年生：78 名、同 4 年生：78 名

関東・関西以外に在住の 3 年生：78 名、同 4 年生：78 名

参考文献

1) 加藤佳子、清水めぐみ「女性の就業意識」、岡崎女子短期大学、2005

2) 島直子「女子大学生の就業意識」『NWEC 実践研究第 6 号』、国立女性教育会館、2015

3) 城島博宣・白河桃子・幸田達郎・城佳子「女子大生の結婚観と職業観の調査」『生活科学研究 34』、文教大学, 2012

4) 吉村英俊、吉田潔、木村温人「働き方とライフスタイル」『知的創造都市 “Creative City” の形成・促進に関する研究』、北九州市立大学都市政策研究所、2008.3、pp.103-135

5) 吉村英俊「北九州地域の大学院、大学、短大・高専、実業高校卒業者の就職地域」『Vol.19 関門地域研究』、関門地域共同研究会、2010.3、pp.51-58

6) 吉村英俊、林一夫「北九州市製造業の女性活躍推進に関する基礎的調査」『2015 年度 地域課題研究』、北九州市立大学地域戦略研究所、2016.3、pp.1-14

7)「女性のキャリア意識に関する調査」、NTT コム オンライン・マーケティング・リサーチ株式会社、2014

8)「2017 年卒マイナビ大学生就職意識調査」、マイナビ、2016